ヨーロッパ聖地巡礼と文明移転
――「巡礼文明論」の手帖 (6)――

吉澤五郎

【内容】

一　サンティアゴ巡礼と海の神話――「サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂」（スペイン）
二　聖ニコラウス巡礼と地中海世界――「聖ニコラウス聖堂」（イタリア）
三　チェンストホヴァ巡礼と「黒いマリア」の傷跡――「ヤスナ・グラ修道院」（ポーランド）
四　ドイツ巡礼運動とバロック美術――「フィアツェーンハイリゲン聖堂」（ドイツ）
五　エルサレム巡礼とアトス山巡礼の間――「リラ修道院・聖母聖堂」（ブルガリア）
［付］「『巡礼文明論』の手帖」（記録・一―五号）

一　サンティアゴ巡礼と海の神話

――「サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂」（スペイン）

ヨーロッパの中世とりわけ一二世紀は、通常「旅人の時代」とも呼ばれる。この時代には、かつての「暗黒の中世」観を覆すような、新しい息吹と生の流動する姿がある。その中でも、ひときわ衆目を集めたのが、人間古来の旅心と民衆宗教に彩られた「巡礼者」の群像であった。とりわけ、全ヨーロッパからの巡礼者が、各自の帽子に縫いつけた「帆立貝」をシンボルとして向かった旅先は、スペイン西北端の聖地「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」であった。その当時、すでに遥かなる「銀河の道」をたどってコンポステーラを訪ねた巡礼者の数は、およそ五十万人にのぼるという。

もとより、キリスト教世界の大巡礼地としては、すでに四世紀来の著名なエルサレムとローマがある。いずれも、主イエス・キリストやその二大使徒である聖ペトロ・聖パウロの殉教に縁の深い、いとも威厳に満ちた聖域である。その後、九世紀以降に、これまでと異なる巡礼の「第三波」が押し寄せることになる。いわゆる、キリストの一二使徒の一人として、スペインに布教した「聖ヤコブ」（スペイン語名＝サンティアゴ）の亡骸を祀るコンポステーラへの巡礼である。すでに、ダンテの『新生』（一二九三年頃）においても、真の巡礼を告げる「三大巡礼地」の一つとして登場している。中でもコンポステーラは、とくに「巡礼」の語源となる「ペレグリーヌス」（Peregrinus-旅人・寄留者）の旅情を豊かにそえるものであった。まず何よりも、ヨーロッパの最北端に位

置するイベリア半島・ガリシア地方にある。さらに、第一次十字軍以後は、イスラームの脅威にもひるまず、一途にキリスト教世界の孤塁を守っている。その遙遠なる「最果ての地」への巡礼こそ、もっとも巡礼の名に値し、真の救済と奇跡への期待をつのらせるものがあった。

本来、このサンティアゴ巡礼への道行は、ある公式のテキストを手本としている。それは、当時の教皇カリクスティヌ二世の作とされる『聖ヤコブの書』（一二世紀中葉）である。今日、サンティアゴ大聖堂の「宝物館」に保管されている。この本の目的は、まさに「聖ヤコブの徳をたたえ、巡礼をすすめる」ことである。いわば、サンティアゴ巡礼の強力な宣伝と世界的な宣揚をはかったものである。全体の構成は、五部からなり、最後の「第五の書」は「サンティアゴ巡礼案内記」（全一一章）となっている。いわゆる、「巡礼」を構成する要件として、その目的と過程の記述が重要である。本書でも、まず目的地となる「サンティアゴ大聖堂」にいたる巡礼の基本ルートが示される。また、その書中には巡礼路上の巡拝すべき聖域とともに、各地での宿場や飲食物等の生活情報、さらに「水の善し悪し」から「善きおもてなし」の規範等も織りこまれている。いかにも、中世巡礼の「のどかにして厳しい」風景が眼に浮かぶようで興味深い。

その「第一章」には、サンティアゴ巡礼の道行きとして、主要な「四大巡礼路」が明示される。いわゆる、多くの巡礼路の中枢となる「フランス人の道」（カミーノ・フランセス）である。その出発点は、フランスの北からパリ（トゥールの道）、ヴェズレイ（リモージュの道）、ル・ピュイ（ル・ピュイの道）、アルル（トゥールーズの道）となる。ヨーロッパ諸国から集う巡礼者たちは、各々にこの「四つの道」をたどりながら、やがてピレネー山脈の「二つの峠」（ソンポール、ロンスボー）のいずれかを越える。

その後、フランス内の南北に分かれたルートは、スペインのプエンテ・ラ・レイナ（女王の橋）で合流して一本道となる。ここから、スペイン北西部の海岸線を横断し、名高いブルゴスやレオン等をへて、一路目的地の「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」へと向かう。いとも敬虔な巡礼者たちは、この「テキスト」を手本としながら、心新たに中世巡礼の恐れと感動を身に体することになる。

ところで、サンティアゴ巡礼は、たんに一宗教現象としてだけでなく、広く中世最大の「歴史・文化現象」としても重要な役割を果たしている。いわば、新興ヨーロッパ文明の誕生と形成にとって、それこそ「聖と俗」のドラマを一大融合する「生ける泉」でもあった。まず、歴史的な観点では、多様なゲルマン諸族の心を統合し、新たに一つの運命を担う「西欧キリスト教共同体」という理念を現実化する重要な契機ともなった。その背景には、何よりもイスラームのスペイン支配に対抗する「十字軍的な情念」がひそんでいる。じつは、史上有名な「レコンキスタ」（国土回復運動、七一一―一四九二年）の精神的なシンボルとなったのが、スペインの使徒として崇められた「聖ヤコブ」であった。

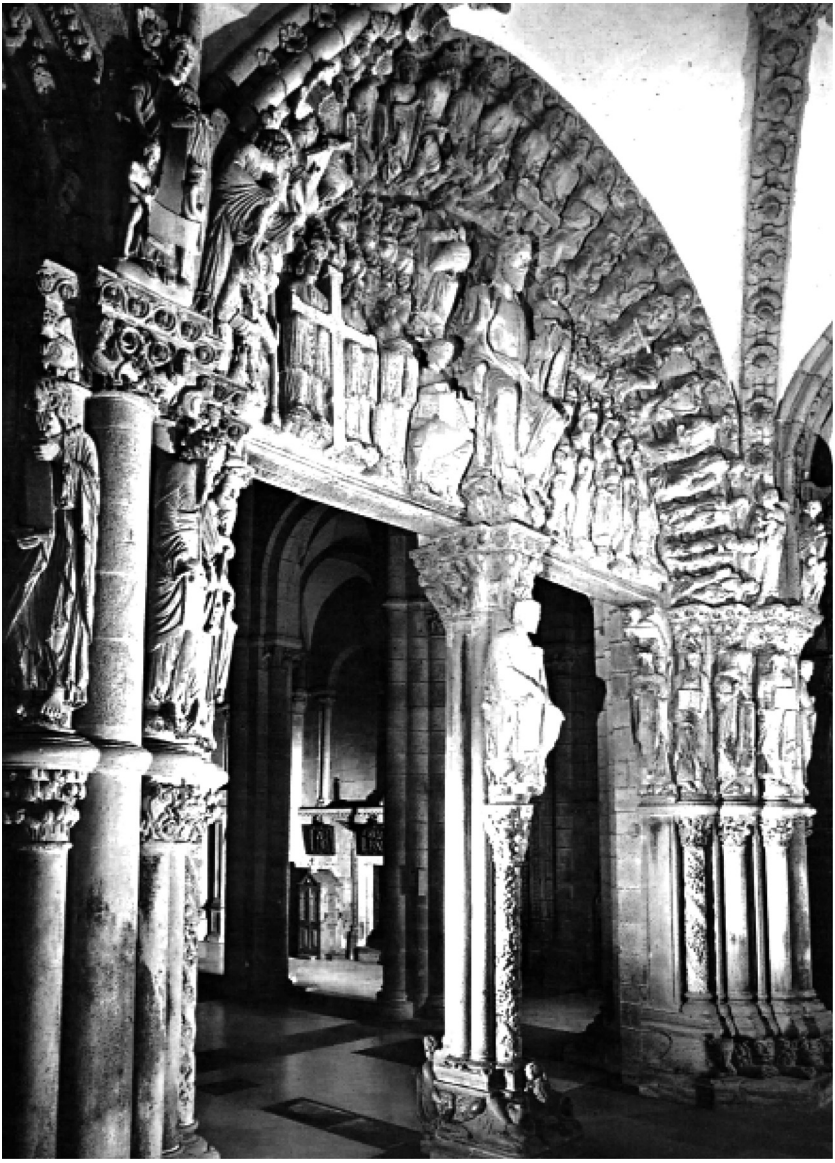
ここに、キリスト教軍の先頭に立ち、勇ましくイスラーム軍と戦う「モーロ人殺し」の聖ヤコブ像が成立する。さらに、その異教徒の進出を阻む影の演出として、サンティアゴ巡礼の聖化と組織化を推進した立役者が「クリュニー修道院」である。これまで、西方の一辺境にすぎない聖地コンポステーラが、いまや比類なき位置をしめ、あえて「西欧の心臓」と称されるゆえんである。このように、西欧文明の自覚と形成にとって、その外的構成となるイスラーム文明の影響を無視できない。いわゆる、広く文明史上の「誕生問題」として、特定の地域に根ざす「内の思考」と、他文明との交流を描く「外の思考」を総観する全体論的な探求が不可欠である。

つぎに、社会・文化史的な観点では、コンポステーラをはじめエルサレム・ローマを結ぶ巡礼路こそ、一大文明としての「ヨーロッパ統合」を整える堅固な基盤となった。いわゆる、西欧中世における交通体系の根幹をなし、高度なビザンツ、イスラーム文化の伝達や物資流入のパイプラインとなる。さらに、その大動脈から毛細血管のようにはりめぐらされた大小無数の巡礼路を通して、広くヨーロッパの文化的統一体が確立される。すなわち、共通の思考、生活様式、慣習、祭礼等の定着をみる。ちなみに、クリスマスに登場する「サンタクロース」の原像は、小アジア（ミュラー現トルコ領）の一司教・聖ニコラウスによっている。今日、その遺骸を納める南イタリア・バーリの「聖ニコラウス聖堂」（サン・ニコラ聖堂）から、陸・海上にわたる巡礼ルートを通してヨーロッパ全土に広まったことも、その一例とされよう。

さらに、美術史的な観点を見落とすことはできない。じつは、このコンポステーラ巡礼に沿う教会群には、最終目的地である「コンポステーラ大聖堂」をモデルにした同一の造形表現が考案されている。たとえば、聖堂の建築や彫刻様式にみる統一性等である。いわゆる、アメリカの鬼才キングスレイ・ポーターが名づける「巡礼路様式」である。この一連の芸術様式の成就こそ、その後西欧世界を彩る「ロマネスク美術」の礎石となる。いわば、ヨーロッパ・キリスト教美術の誕生を告げる「ロマネスク美術」は、じつはコンポステーラ大聖堂を模範とする巡礼路に開花した芸術でもある。たとえば、フランスの巡礼路に佇むコンクのサント・フォワ聖堂やトゥルーズのサン・セルナン聖堂等は、その代表な事例となろう。

他面、そのロマネスク美術の深層には、イスラーム主導の「モサラベ美術」（九世紀末―一一世紀）やシリア・アルメニア写本を手本とする「ベアトゥス写本」（八世紀末―一〇世紀）といった東方の遺産がある。いわゆる、

サンティアゴ大聖堂 西正面
（12世紀「ロマネスク様式」―17・8世紀「チュリゲレスコ」様式）



同 ── 西入口
（「栄光の門」 ── 聖ヤコブ坐像、12世紀後半）

西欧の独創性を誇る「ロマネスク美術」の誕生問題についても、新たな「起源説」や「影響文明圏」等の観点も必要であろう。総じて、西洋キリスト教美術の源泉には、東西を結ぶ造形上の「心と形」がひそかにやどされている、といえよう。

このように、サンティアゴ巡礼は、西欧文明の霊的生命とともに、とりわけその歴史的形成に大きく寄与している。いわゆる、ヨーロッパ巡礼史上に名を連ねる「古代教会的巡礼」（ローマ、エルサレム）をはじめ、その後今日におよぶ「近代教会的巡礼」（ルルド、ファティマ）巡礼等とも異なる、サンティアゴ巡礼の特異性がここに認められる。

もっとも、今日では、新たなサンティアゴ巡礼への視点として、これまでの古伝承（「聖ヤコブ崇敬」）をこえる「聖性論」の探究が必要であろう。いわゆる、聖地コンポステーラの「聖なる根拠」と意味を問う新たな挑戦である。その淵源は、通説の霊験あらたかな「聖ヤコブの墓」というより、むしろ高名なアルフォンス・デュプロンが指摘するように「海の神話」に求められよう。まず、地理上の「コンポステーラ」の位置は、ガリシア海西方にのぞむ「最果ての地」（フィニス・テラエ）にある。ちなみに、方角としての「西方」は、申すまでもなく太陽の没する方向であり、元来「死と再生」という二重の意味をやどしている。おそらく、聖ヤコブを慕って西方に向かう巡礼者の旅は、新たな贖罪と復活を求める自己救済の旅であったのだろう。

さらに、コンポステーラの聖性は、この極西の地に古くから根づく「海の神話」に結合する。これまで、世界の多くの創生神話が託した「原初海洋」のイメージは、広大な「母なる水」として無限の生命力と不死性に結ばれる。かつて、この地に先住したケルト人の信仰は、永遠なる霊魂の不滅を本懐とし、西の果てる海の彼方に

「ケルトの楽園」があると信じた。他ならぬコンポステーラの聖性も、きっと地球全体をとりまく「オケアノス」（海洋）の深淵に由来するのであろう。ヨーロッパの各地から詣でる巡礼者にとって、遥かに望むコンポステーラは、まさに「宇宙饗宴」の舞台でもあった。このように、コンポステーラの「聖性」は、新たに「海の神話」の象徴性とケルト人の「他界観」からも解かれるべきであろう。

他面、この「海の神話」に連なる身近な表象として、周知の「聖ヤコブの貝」（コキーユ・サン・ジャック）という徽章がある。通常、キリスト教の三大巡礼地では、それぞれの巡礼を象徴する固有の標識がある。たとえば、エルサレム巡礼は、キリスト教の勝利を象徴する「棕櫚の葉」である。またローマ巡礼は、天国への深遠な扉を開く「鍵」となる。ところで、このサンティアゴ巡礼の場合はどうであろうか。それは、一見無価値にも見える「帆立貝」である。きっと、多くの巡礼者は、聖地コンポステーラから西海岸の村パドロンまで足をのばし、巡礼記念の証しとして浜辺の貝を拾ったのであろう。一種の、聖化された巡礼土産でもある。

目下、その選定理由についての定かな資料も見出せない。それだけに、人びとの想像力を刺激し、諸説が飛び交うことにもなる。先の『聖ヤコブの書』では、帆立貝は「手の指を広げた状態」に酷似することから、巡礼者が行うべき「善行」を示すという。他の一説では、「帆立貝」のいかにも奇抜で神秘的な造形美をして、特別の「守護符」に変容したとも推測する。他方、最近の「ケルト研究」では、その選定理由の根拠に「ケルト神話」の存在をあげている。

この深遠な謎解きに関して、とくに「帆立貝」が秘める普遍的な意味にも注目したい。もとより、帆立貝は一種の象徴記号として、女性原理や母胎にかかわる「生命の源泉と再生」を表している。いわば、生と死の全的な

存在にわたる霊的な記号であり、また隠された生命の蘇えりを待つ祈願でもある。その特段の効力は、かの有名なアフロディテ（ヴィーナス）の「誕生」にも読みとれよう。サンティアゴ巡礼を彩る帆立貝は、他ならぬ海洋が秘める不死の生命につながり、その願望を事物として明示した「偉大な記号」ともいえよう。

ここに、あらためてサンティアゴ巡礼の道行きを省みるとしよう。とくに、その根幹となる「聖性論」は、従来の「聖ヤコブ崇敬」という古伝承もさることながら、新たにケルト信仰もそえる「海の神話」につなぎ、その深淵に「聖なるもの」の普遍性を読み解くことが重要であろう。

かつて、まだ世上にコンポステーラの名は知れず、ましてスペインの「最果ての地」を目ざす巡礼者は稀有であった。私自身、歴史的な中世巡礼の原型をたどる「ヨーロッパ・地中海巡礼紀行」（一九七八―九八年）の一環として、フランスからアルプス越えの「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」巡礼に出向いたのは、一九七八年と一九八八年のことであった。ちなみに、ユネスコの「世界遺産」に関して、このコンポステーラの「旧市街」を選定したのは一九八五年であり、それに続くフランスからの「巡礼路」の選定は一九九三年のことであった。

一片の私的回想として、いわば「ユネスコ」の公式な認定に先立って、いち早く聖なる「普遍的な価値」を目指す旅路についたことになる。

二　聖ニコラウス巡礼と地中海世界

――「聖ニコラウス聖堂」（イタリア）

一つの比喩として、イタリアはよく「長い靴」にたとえられる。現にイタリアは、南北およそ千三百キロメートルにおよぶ長大な半島である。その南部イタリアの、いわば「長靴のかかと」の部分にあたるのが「プーリア」地方である。すでに、青銅器時代には人間居住の痕跡がみられる。さらに、紀元前八世紀の初頭には、ギリシアの植民市としてラコニアのスパルタ人が新たな町タラス（現タラント）を興している。また、紀元前三世紀の後半には、古代ローマ人がいち早く軍港の拠点（現ブリンディジ）として利用している。その後、南イタリアを侵攻したビザンティン帝国やノルマン人をはじめ、長期にわたるヨーロッパ列強の支配が続いた。このプーリア地方が、新たにサルディニア王国を中心とする統一イタリア領に組まれたのは一八六〇年のことである。

元来、この地方は、アドリア海に面する地理上の利点から、大国のエジプトとギリシアをむすぶ交通の要衝となり、とくに東方世界に出向く「踏み台」として重要な役割を果たしている。このように、多彩な彩をそえるプーリア地方の首都が、今日でも有名な港町である「バーリ」である。バーリの町は、すでに古代ローマ時代から「バリウム」の名で広く知られ、中世を通じても「東方世界への橋頭」として活況を呈している。かつては、南イタリアにおけるビザンティン支配の中心地でもある。とくに、中世来の面影をやどす「旧市街」は、海に突きだす岬の上に築かれており、なんともオリエントの風情が漂う。ところで、一般に南イタリアの印象はどうであ

ろうか。通常、イタリアの「アキレス腱」として、その歴史的な後進性と経済的な貧困が語られることも多い。しかしバーリでは、今日でも伝統的な「国際見本市」が催され、地中海沿岸諸国との交易を深めている。ちなみに、最近（二〇一七年）の五月には、バーリで日本をふくむ「G７（主要７カ国）財務相・中央銀行総裁会議」が開かれており、世界の大きな耳目を引いた。

ところで、このバーリの大いなる繁栄を促した二つの「歴史的な要因」がある。その一つは、古来の名高き「聖ニコラウス伝承」をつむぐ聖所（バシリカ）の存在である。他の一つは、東方イスラエルに向かう「十字軍」遠征の出発港でもある。ここでは、とくに前者の「聖ニコラウス伝承」の原郷と歴史的な展開について一考しよう。いわゆる、かつて小アジアの地中海世界に名を馳せた「聖ニコラウス崇敬」と、その衣鉢をつぐ南イタリアの「バーリ移転」問題である。申すまでもなく、この「聖ニコラウス」（ラテン語名）とは、中世来のもっとも人気のある聖人であり、また今日の「クリスマス」を彩る有名な聖人「サンタクロース」の原像である。ちなみに、世界的な知名度を誇る「聖ニコラウス」の呼称は、各国語でニコラオス（ギリシア語）、ニコライ（ロシア語）、ニコラ（イタリア語）およびニコラス（英語）となる。そのヨーロッパ史上の精神史をはじめ、今日におよぶ社会・民衆史や文学・美術史上にあたえた影響も無視できない。

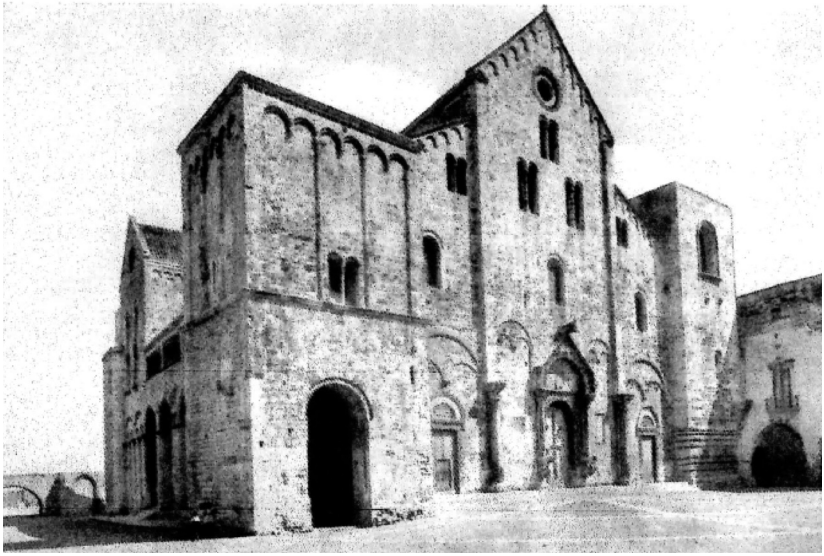
今日、この「聖ニコラウス」像については、まだ厳密な歴史的な資料も乏しく、その生涯についても何かと諸説が飛び交う現況にある。ここでは、すでに大方の一致をみた記録等を手がかりにして、まずその多彩なプロフィルの一端を描くとしよう。まず、聖ニコラウスは、二七〇年に地中海に面した小アジア（現トルコ、南西部リキア地方）のパタラで生まれたとされる。いとも敬虔で裕福な両親のもとで、熱心なキリスト教徒として布教活

動に勤しんでいる。彼は、両親がのこした莫大な資産のすべてを貧困者に施した、との逸話もある。

じつは、このパタラという町は、ギリシア人の殖民による港町である。ことに、民衆生活の心情として、ギリシア神話に登場する「アポロン神」の崇拝がさかんであった。このアポロン神は、申すまでもなく主神ゼウスの子であり、同時に光明の神として太陽とも同一視される。その後、聖ニコラウスはある啓示に導かれて、同じ小アジアのミュラ（現トルコのデムレ）の司教（主教）に推挙される。その折も、同地には、すでにローマ神話を飾る多産の神で、アポロンの妹にもなる「ディアナ神」の崇拝が流布している。聖ニコラウスは、このような異教的な風土の中で、外来の神々とその祭典の中止を要請し厳しく批判した、との記録もある。

さらに聖ニコラウスは、一時、ローマ皇帝ディオクレティアヌスによる幽囚の身を解かれて、その後同じくローマ皇帝コンスタンティヌス一世が招集した「第一回ニカイア公会議」（三二五年）に出席している。周知のように、この小アジアのニカイア（現トルコのイズニク）で開かれた公会議は、教会史上にみる最初の宗教会議であり、全東方圏の司教が列席した最高会議でもある。その折に制定された有名な「ニカイア信条」は、今日におよぶ「キリストの神性」という教理と教会規律を定めたものであり、そのキリスト教史上の意義は大きい。もっとも、この会議の議題となる「キリスト論」をめぐっては、聖ニコラウスのアリウス批判等の記録がのこるものの、肝心の「出席者リスト」にその名を見ることはできない。

総じて、聖ニコラウス伝承の形成については、何分にも後世の有徳な聖者像も加味されており、その新たな脚色をへて「理想的な聖者」像に昇華されたのであろう。中でも、その後に実在した同名の司教「シオンのニコラウス」（六世紀）の影響は大きい。ここに、新装なった聖者像として、キリストの教えを伝道し、悩み苦しむ人



サン・ニコラ聖堂正面（バーリ、1197年）

聖ニコラウスのイコン（13世紀初頭、エジプト・シナイ山「聖エカテリニ修道院」）

間に愛のわざと生きる光をあたえる「聖ニコラウス」像が誕生する。やがて、このニコラウスに対する信仰は、六世紀から九世紀にかけて、小アジアのミュラからビザンティン帝国の首都コンスタンティノポリスおよびその全土へと拡大される。とくに、東方教会での信仰は厚く、熱狂的な信心を凝らした「ニコラウス伝説」が醸成されることになる。

その後、十一世紀末には、聖ニコラウスの聖遺骨が南イタリアのバーリに移送（一〇八七年）される。このバーリを聖なる拠点にして、新たなニコラウス信仰の種子が広くヨーロッパに播かれたことになる。いわゆる、小アジア・ミュラの一司教に献堂された「聖ニコラウス聖堂」（「サン・ニコラ聖堂」）の建立（一一九七年）である。この聖堂は、旧市街の中央部にあり、ロマネスク様式の典型的な作例として名高い。また、この地方におけるすべての宗教建築の原型として、先導的な役割りを果たしている。聖堂正面を飾るファサードは、いかにもノルマン様式の開放性にとみ、かつ簡素にして力強い。右側面には豪華な「ライオンの入り口」が構えている。また聖堂内部では、一二世紀に製作された豪華な天蓋つきの主祭壇や聖ニコラウス伝説を再現した群像等が注目される。なお、地下祭室（クリプタ）には、今やバーリの守護神でもある「聖ニコラウスの遺骨」が安置される。一説では、そのクリプタを支える列柱の一つは遠くミュラから運ばれたともいう。今日でも、聖ニコラウスの渡来を記念する「五月八日」には、いかにも「船乗りの守護聖人」にふさわしく、海上を一舞台とした盛大な祭礼が催される。

他方、一三世紀の後半には、イタリア・ジェノバの大司教を務めたヤコブ・デ・ウオラギネが、世に名高い『黄金伝説』を著している。この本は、これまでの有名な聖人伝説や民間伝承等を教会歴にしたがって集成した

大作である。とくに、中世から近世にかけては、キリスト教正典の『聖書』とならんで広く愛読された貴重な書物でもある。まさに、後世に冠せられた「黄金」の美称に相応しく、世に「キリスト教聖人伝の白眉」とも称される。ちなみに、本書全体の構成は、序文のほかに一七六の章節からなる。また、「目次」上の配列では、冒頭の使徒聖アンデレの項目につぐ二番目に「聖ニコラウス」の名が登場する。その他にも、ゲオルギオスやアッシジのフランチェスコ等の著名な聖人が顔をそろえて壮観である。もっとも、本書の目的は、キリスト教精神の称揚にあり、ヨーロッパのキリスト教化に大きな貢献を果たしたともいえよう。

ところで、この『黄金伝説』で紹介される「聖ニコラウス」像の姿はどうであろうか。およそ、その生涯にわたる善行から死後の奇蹟などにおよんで、まことに広範にして多彩である。たとえば、美術史上の一例として、聖ニコラウスの「伝記イコン」の周囲には、じつに多くの奇蹟物語が描かれており、身近に鑑賞することができよう。そこで、とくに今日にも語りつがれる主要な伝承を中心に点描するとしよう。まず、「聖ニコラウス伝承」の最古層ともなる、その遺骸の「バーリ移転」問題である。古来の伝説上、およそつぎのような筋書きである。ある時、エーゲ海上で嵐に遭遇し、難破に瀕した船乗りたちが、救いを求めて聖ニコラウスに祈り、その名を讃えて無事に救援されたとの話である。この聖なる奇蹟は、たちまち船乗りの間に広まり、後世に「船乗りの守護聖人」として崇められることになる。

もとより、聖ニコラウスの死後（三四二年）、その遺骸は小アジアの「ミュラの聖堂」（「聖ニコラウス聖堂」、六世紀）に埋葬されている。その後日譚として、時は移り十一世紀のことである。イタリアの船乗りたちが、いまや荒廃したミュラの古き墓地に遺骨を発見し、その聖なる遺産をイタリアのバーリに持ち帰ることになる。ここ

に、あらためて埋葬された聖所が、南イタリア・バーリの「聖ニコラウス聖堂」（サン・ニコラ聖堂）となる。もっとも、現実の移送問題は、少々事情が異なってくる。その真相は、すでに一一世紀にはイスラーム勢力が小アジアの西海岸まで進出している。ミュラの町は、むしろ自ら退散を余儀なくされた、といえよう。その思わぬ窮状を背景にして、かねてより聖ニコラウスの遺骸移転を懇請したバーリの一商人が、いわば望み通りに引きとったともなる。それ以降、聖ニコラウスの名は全ヨーロッパに伝わり、広く信奉される端緒となった。いまや、西地中海沿岸のミュラに生まれた一司教が、一躍にして全世界に名をなす一大聖者に昇格したことになる。

なお、小アジアの古き「ミュラの聖堂」については、近年とくに日本の調査団による発掘作業がすすんでいる。すでに、創建時の所在（現トルコのゲミレル島）や全盛時代の「四つの聖堂」の偉容等が明らかにされている。その報告の一端には、とくに「第三聖堂」の内陣を飾る装飾として、色彩豊かなモザイク模様や大理石の浮彫り等の装飾が紹介されている。申すまでもなく、この両装飾の画題となる「石榴の木」や「アカンサスの葉」は、古代地中海世界で広く愛好された代表的な装飾モティーフでもある。

つぎに、聖ニコラウスのもっとも有名な逸話として、無償の愛を秘めた「隠れた施し」の善行がある。およそ、つぎのような筋書きである。あるミュラの貧しい貴族の娘たちに、夜ひそかに婚資として金貨の袋を投げ入れ、その聖人のお蔭で「幸福な結婚」にあやかった、との話である。後日、不意の恩恵に驚く父親を前に、聖ニコラウスは「自分が生きている間は、決して他言しないように」と堅く口止めしている。この隠れた美談は、やがて市井の噂として広まり、多くの人びとの心をとらえて世界中の人気をさらう誘因となった。

他面、このような聖ニコラウスの奇蹟や善行は、よく宗教劇の題材としても登場し、中世ヨーロッパの演劇史

を飾ることになる。すなわち、「よい子にくるみをあげ、悪い子をしかる」という役割を、仮装した聖ニコラウスが演じることになる。本来、その晴れの舞台は、聖ニコラウスの祝日となる一二月六日の前夜であった。いわゆる、この心和む聖ニコラウスの伝承が、今日のキリスト教を彩る「クリスマス」（待降節）に結合し、さらに華麗なる「サンタクロース」への変身をとげたといえよう。

ここに、あらためて「聖ニコラウス伝承」の全容を究める旅路として、新たな知の航海に向かうとしよう。その予備的な考察として、まず主要舞台となる小アジアのミュラと南イタリアのバーリをむすぶ地政学上の問題について一考したい。古来、地中海にのぞむ両者は、ともに有名な港町として名をなしている。一方のミュラは、古くからエジプトとイタリアをむすぶ中継貿易の地であり、かねて多くの船団が立ちよる港町であった。時には、名高い「地中海の嵐」を避ける避難地ともなった。他方のバーリは、いち早く地中海貿易の拠点として栄えた港湾都市であり、今日におよぶ商工業の中心地としても名高い。

ところで、両者にわたる共通点として、いずれも広大な地中海を背景とする「港町」であることが判明する。一般に、歴史的な港ないし港湾施設には、他国の多くの船舶が出入りし、また遠来の乗客を迎えて人びとの往来も多い。他面、古来港のイメージは、苦難に満ちた人生航路の終焉として、永遠の祝福を約束する「平和の象徴」とも解された。このような港町特有の場景は、暗に「船乗りの守護聖人」ともされる「聖ニコラウス」伝承を広める機縁になった、ともいえよう。

さらに、広く両者をつつむ「地中海世界」に眼を転じるとしよう。周知のように、地球の表面の三分の二は海に覆われている。広大な生命体である海は、これまで他者を「隔てる」と同時に「結びつける」という両義性の

中で、むしろ文明交流の一役を担ってきたといえよう。一連の食料供給や経済交易の形だけでなく、豊かな精神文化を育む土壌でもあった。いとも美しく、紺碧の空と海に輝く地中海世界は、現にヨーロッパ、アフリカ、アジアにまたがり、多様な文明が織りなす「文明の十字路」でもある。いわば、諸文明間の交流と変容の動態を描く「歴史的・地理的な場」として重要である。ちなみに、いち早く卓抜な「文明交流圏」の構想を著した伊東俊太郎氏は、その歴史的な拠点を記した「世界史上のリスト」の冒頭に、まず「地中海文明交流圏」の名を掲げている（『比較文明』、一九八五年、新版二〇一三年、東大出版会）。いま、「聖ニコラウス伝承」の新たな解読として、とくにその誕生と移転問題に関する「海から見た世界史像」が不可欠であろう。

つぎに、古代教会より遵守された「聖人崇敬」という基本問題についても検討したい。ここでの「聖人崇敬」とは、すでに世を去って神のもとにある聖人との交わりである。また、自ら「信仰者の模範として仰ぎ、神へのとりなしを願う」という信仰行為である。きっと、罪深い人間にとって神はあまりにも遠く、正面から祈願するのは恐れ多い、との心中であろう。この遺制については、じつは太古の自然宗教や民間信仰等の資産に負うことが多い。あるいは、その多様性を不可欠な要素としながら、新たにキリスト教的な意味と価値を築いてきた、ともいえよう。いわゆる、歴史上の「自然宗教」と「啓示宗教」の秘かな出会いと新たな精神的な遺産の創出である。無論、現存の多くの宗教とともに、キリスト教の歴史的な形成についても、その例外ではない。

ここに、その代表的な一例として、世に名高いキリスト教の大祭である「クリスマス」と「サンタクロース」の由来を省みるとしよう。申すまでもなく「クリスマス」とは、「イエス・キリストの降誕を祝う祭日」である。英語上の「キリストのミサ」との意味である。もっとも、イエス誕生の正確な月日については、これまで『聖

書』に明記されるわけでもない。では、なぜ特定の「一二月二五日」に規定されたのだろうか。じつは、その背景に古代オリエントに起源をもつ「ミトラス教」の存在がある。このミトラス教とは、太陽神である「ミトラス」を祭神とする密議宗教である。とくに、ローマ帝国において広く流行し、キリスト教が公認（三一三年）を得るまで有力な一翼を担っている。

ところで、ミトラス教では、「ローマ暦」の冬至にあたる一二月二五日を「太陽神」の誕生日としている。いわゆる、不滅なる太陽の新生を祝う荘厳なる祝日（冬至の祭り）である。後続のキリスト教は、おそらくそのミトラス教の祝日にあやかって、新たな祝日（クリスマス）を設けたのであろう。まさしく、キリストこそ「正義の太陽」であるとし、その「主の日」（降誕祭）を「一二月二五日」に定めたことになる。ちなみに、『新約』に引用される太陽像は、すべてイエス・キリストの歴史的な位相を象徴している。いわば、イエスと太陽の間柄は、相互に美しい調和のもとにあったともいえよう。このように、あらためて「クリスマス」の成立を省みても、その源泉に先行するミトラス教の大きな影響を無視できない。その他にも、クリスマスにちなむ伝統的な行事として、たとえば祭壇の「馬小屋」の模型やクリスマス・ツリーの飾り等も、じつはキリスト教化以前の土着信仰や民間習俗を基盤にしている、といえよう。

では、このクリスマスに欠かせない「サンタクロース」に関してはどうであろうか。今日でも、広く一般民衆に親しまれ、とくに世界の子供たちに愛される一大スターでもある。ちなみに、「サンタクロース」とは、新天地を求めてアメリカに渡ったオランダ系移民の「シンタクラース」が訛ったものである。そのオランダ語の原義は、申すまでもなく、小アジア・ミュラの司教「聖ニコラウス」を指している。今日の「サンタクロース」像は、

このアメリカに渡ったオランダ系移民によって、まずアメリカ全土に広まり、さらに世界中に広がったといえよう。今日、サンタクロースのもっとも有名な逸話は、「クリスマス・イブ」（一二月二四日）に届けられる「子供たちへの贈り物」であろう。この定型化された聖人像は、すでに、「宗教改革」以後のオランダやドイツを中心にみられる。

ところで、この微笑ましい美談の原形は、かつて聖ニコラウスが貧しい「三人の娘」に金貨を施したという、小アジア・ミュラの有名な故事に負っている。もとより、聖ニコラウスは、かねてより「子供の守護聖人」としても名高い。また、聖ニコラウスの正式な祝日は「一二月六日」である。その前夜（一二月五日）は、子供たちが待ちわびたプレゼントが届く最良の日でもある。

他面、「聖ニコラウス伝承」は、当時のクリスマスにちなむ多くの慣習や行事等について興味深く語っている。たとえば、聖ニコラウス一行による戸別訪問や子供たちへのプレゼントの風景、さらに「冬至の祭り」の由来等である。今日におよぶこれらの諸行事は、いずれも古きゲルマンの神話や北欧の伝説さらにアルプス山間部の習俗等に負うものが多い。いわゆる、サンタクロースの原形となる「古き形態」の風景である。もっとも、この古き「サンタクロース」像は、たんに子供の躾けや教育だけに留まらない。あたかも、現代社会にとって、隠された愛の秘蹟によって人間が結ばれることを伝えるかのようである。

ここに、新たな学的動向に関連して、あらためて「シンクレティズム」（重層信仰）の課題が浮上する。すなわち、異なる伝統的な諸要素の集成と同化という難問である。その巧妙な折り合いと抵抗の葛藤から、どのように創造的な名案を得るのだろうか。その課題は、たんに無節操な混淆主義や折衷主義として、過去の追憶にとど

まるのではない。むしろ、現在に生きる希望の調べとして、新たな和解と融合の道しるべを開示することである。一例をとれば、今日人類学や民俗学上の課題となる、いわゆる静態的な「残存理論」を歴史の動態論としての「創造理論」につなぎ、現在に生きる「新たな民俗観」を創出することである。古来、人間の超越的な志向性として、両者の底流には主体性による選択的な借用と創造的な変容への脈動がある、ともいえよう。とくに、今日におよぶ「聖人崇敬」の考察にも、やはり新たな全体性から相互の関係性を読み解く創造的な解明が不可欠である。

その知的試行の一環として、一方に文化人類学の「文化動態論」がある。いわゆる、各文化間の接触と変容過程を描く「文化変容」という新たな概念に注目したい。さらに、その文化的な概念を取りこむ信仰解釈として、現代カトリック教会の課題ともなる「文化的受肉」という実践神学も誕生している。そのような新知の黎明と共同性は、新たな世界史を読み解く知の挑戦として、広く人類之明史上の「文明移転」と土着化の問題を解く比較文明学の船出ともなった。

ひとこと、比較文明学の見地をそえるとしよう。まず「文明移転」の問題として、とくに他文明への宗教移植には、その本質的なものから偶然的な付加物を識別し、かつ分離することが重要である。いわゆる、宗教的使命の核心をつく「本質剥離」の問題である。つぎに「土着化」の問題として、ある特定の外来宗教や思想が導入される場合、その相互浸透と相克をへながらも、どのように伝統的パトスの内発的価値として根づくかの問題がある。いわゆる、「土俗化」に堕する危険性の自覚と超克である。

あえて、文明移転としての「キリスト教の土着化」問題をかいま見よう。じつは、外来のキリスト教がローマ帝国の国教になった理由も、自己のヘブライズム的な観念や理想を、土着のヘレニズム的な科学や哲学に翻訳し

直したからである。いわば、歴史的に自己喪失を免れた土着化の成功事例である、ともいえよう。今日、文字通りの「地球文明」を迎える中で、とくに全人類をつつむ総体的な視座と架橋の精神に留意したい。総じて、歴史上の文明は多様な出会いによって生成し、また宗教芸術の精華は深奥の神秘のもとに響きあう、といえよう。

かつて、この地中海世界に湧出した「聖ニコラウス伝承」に魅せられて「二つ旅路」についたことがある。まず、東方の「小アジア」（別名アナトリア）に出向いたのは、古代オリエント世界を舞台とする「初期キリスト教の成立」と「聖パウロの道」を辿った一九八二年と八六年のことである。他方、西方のとくにイタリア南部のバーリを訪れたのは、「ローマ巡礼」からモンテ・サン・タンジエロ巡礼へと足をのばし、さらに大天使「聖ミカエル」の守護に導かれて「十字軍の道」を歩んだ一九七九年のことであった。

今日、あらためて地中海巡礼の風光に身をよせながら、ふと悠遠なる宇宙と人間存在の根基に眼をとめ、新たに人類を結ぶ「同一性の中の多様性」（Diversity in Unity）に想いをめぐらす意味は重い。

三　チェンストホヴァ巡礼と「黒いマリア」の傷跡

――「ヤスナ・グラ修道院」（ポーランド）

かつて、「東欧の大国」とも謳われたポーランドは、一説に「大洪水」の流れにも比せられるように、まさに激動の受難史を告げている。ポーランド人の祖先とされるポラーニエ族が、それまで分裂したスラブ諸族を統合し、ヴィスワ川流域に最初の統一国家を建設したのは一〇世紀の中葉（九六六年）である。その後、とくに東西

ヨーロッパを結ぶ交易の中継地として発展をとげる。一時は、とくに一六世紀から一七世紀にかけて、北部のバルト海から黒海、さらにモスクワにわたる広大な版図を領有したこともある。しかし、その地理上の利点はかえって災いに転じ、それこそ内憂外患の多難な時代を迎える。

まず、北欧のスウエーデンは、一六五五年にポーランドに侵入して全土を席巻し、首都のワルシャワや古都クラクフを占領する。当時の国王ヤン・カジミェンは、いち早く国外に逃亡して「国家存亡の危機」に立たされる。さらに、一八世紀には、国益を企む国際関係の駆け引きに乗じて、ロシア、プロイセン、オーストリアによる大規模な「ポーランド分割」（一七七二、一七九三、一七九五年）が断行された。その大国の暴挙によって、ポーランドは完全に分断される。なお一時は、その国名が世界地図から姿を消すという悲運を蒙ることになる。やがて、第一次世界大戦をへてようやく悲願の独立を達成する。しかし、それも束の間の夢にすぎず、ふたたびナチス・ドイツとソ連に併合される。さらに、第二次世界大戦後の独立もままならず、新たにソ連邦に組み込まれた。ポーランドの「真の独立」は、さらに遠く一九八九年を待たねばならなかった。

このように、度重なる苦難の時代にあっても、ポーランド人の民族的な誇りとアイデンティティが失われることはなかった。むしろ、歴史的な苦難の深淵から不死鳥のように蘇った、ともいえよう。そのポーランド人の心を照らす光源となったのが、じつはチェンストホヴァのヤスナ・グラ修道院であり、またそこに安置される「黒い聖母」像である。ここに、カトリックはポーランドの永続的な価値となり、また愛国心のシンボルとも化した。とりわけ、その政治的および国民生活への影響力は大きい。もっとも、その過度な結束力に、一抹の「ポーランド・メシアニズム」の影を見ないわけでもない。

ところで、元来西スラブ族に属するポーランド人は、その建国以来、西方のカトリック教を受け入れている。その始点は、一〇世紀末、ピアスト朝のミェシュコ一世が、ローマに直結するラテン典礼のキリスト教を採択したことによる。その点では、他の東スラブ族（ロシア人、ウクライナ人）や南スラブ（セルビア人、ブルガリア人）とも異なる。事実、ポーランドのカトリック教徒は、その地政学的な意味をもふくめて、自国の使命を「キリスト教会の防壁」と任じる向きも少なくない。では、ポーランドのカトリック信仰、とりわけ「マリア信仰」とはどのようなものだろうか。まず、その特徴について、とくに東方正教会にみるマリア信仰との対比からかいま見よう。

もとより、一般に『聖書』にみる「聖母マリア」の記述は、いかにも限定されるかのようである。すなわち、一部の「受胎告知」や「イエスの生誕」あるいは「エジプトへの逃避」等の場面をのぞいて意外にも少ない。他面、古代教会においては、その聖母崇拝も「キリスト論」の神学的な補強として位置づけられる。とくに、東方のキリスト教世界では、聖母の尊称を「テオトコス」（Theotocos―「神の母」）としている。その通常の論理をこえた大胆な尊称は、やがて賛否両論の波紋を呼びながらも「エフェソスの公会議」（四三一年）で公式に承認された。今日でも、東方キリスト教徒にみる「マリア崇敬」へ情念は深いものがある。

他方、西方のカトリック教会では、すでに中世における神学の一部門として「マリア学」なるものがある。とくに、キリスト教信仰の厚い教皇として知られるピウス九世（在位・一八六〇―七八年）の頃から急速な発展をとげる。さらに、一八五八年には、南フランス・ピレネー山中の寒村ルルドでの「聖母の出現」が報じられた。周知のように、当時一四歳の少女ベルナデット・スピルーの前に聖母が現れ、自ら「私は無原罪の宿りである」と

名乗ったという。同様の奇蹟は、なぜかアラビア語の地名を冠するポルトガルのファティマをはじめ、各地にあいついだとされる。その機縁から、西欧世界でも聖母出現の地を目ざす巡礼運動が盛んになり、新たにマリア信仰の高揚を促すことになった。ちなみに、いまや世界的な名声を博する聖地ルルドには、毎年心身の癒しとして「聖なる泉の水」を求める二百万人もの巡礼者が訪れるという。

つぎに、ポーランドにおける「マリア信仰」の特異性に注目したい。いわゆる、これまでにみた東方正教会の神学論や、カトリック教会の歴史的な様相とも異なる一種独特の形態である。まず、ポーランドの「マリア信仰」を飾るのは、チェンストホヴァのヤスナ・グラ修道院（礼拝堂）にある「聖母像」である。通常、この聖母像は「黒いマリア」とも、また「黒のマドンナ」とも呼び慣らされている。一先ず、その由来に眼をとめよう。

いわゆる、一七世紀の中葉は、ポーランドにとって歴史的な試練の時代である。とくに、先述の「スウェーデンの侵略」（一六五五年）は、まさに国家の命運を揺るがす最大の脅威であった。この窮地にあって、スウェーデン軍の激しい攻撃にも屈せず、いわば「最後のとりで」として居城を守ったのがチェンストホヴァのヤスナ・グラ修道院である。まさに、修道院名の語源となる「光の丘」（Jasna Gora）を偲ぶものがあった。その「聖なる凱歌」は、いかにも高らかな「奇蹟」のようにも映った。さらに、その奇蹟の成就は、他ならぬ修道院に祀られる「聖母像」の加護による、との信心をさそう。

一方、当時のジョン・カシミール王は、この聖母を「ポーランドの女王」と讃え、またヤスナ・グラ修道院を「霊的首都」と宣言して国威の発揚をはかった。じつのところ、当時その聖母像は安全な場所に移されており、すでに存在しなかったともいう。いわゆる、この聖母像にまつわる伝説は数多く、まだ深い謎につつまれている

といえよう。

ともあれ、この外敵の攻撃にさらされた町が聖母像の加護によって救われる、との「奇跡譚」が広く内外に伝わることになる。その後、度重なる亡国の悲運に際しても、たとえば自国を裂く「ポーランド分割」（一七七二―九五年）に見舞われても、かの「聖母マリア」への信仰が衰えることはなかった。むしろ、一九四六年に「ナチス・ドイツ」の支配から解放された折には、それこそ無数のポーランド人が感謝の念をこめて「チェンストホヴァ巡礼」に向かったという。

さらに、第二次世界大戦後の社会主義政権に移っても、聖母マリアを慕う巡礼のともし火が消えることはなかった。むしろ、その巡礼熱は、共産主義に抗する「連帯」運動において頂点に達している。今日でも，聖母マリアが天の栄光にあずかる「被昇天」の祝日（八月一五日）には、全国から三十万人もの巡礼者が訪れるという。このように、ポーランドにおける「チェンストホヴァ巡礼」の誕生は、まさに「亡国の悲哀」をなめた民族が心に刻む信仰の賜物である。同時に、その心の襞をつくろう厳しい現実の歴史的な所産であった、ともいえよう。

ところで、ヤスナ・グラ修道院の聖母像は、一見して全体に暗い色調につつまれており、深い憂いに沈むかのようである。その点では、ロシアの国民的至宝として神秘的な美しさが漂う「ウラジミールの聖母」（イコン）と対照的である。ちなみに、このヤスナ・グラ修道院は、一三八二年にハンガリーで始まった「聖パウロ会」の修道士のために創建された。その守り本尊ともなる「聖母像」の右頬には、なぜか刃物で傷つけられた痛々しい傷跡がのこる。その象形は、いかにもポーランドの「苦難と試練」の歴史を刻むかのようである。もっとも、この不祥事についてはまだ信頼に足る資料も少ない。一説では、タタール人による危害説や奉納品を狙った盗賊の

チェンストホヴァのヤスナ・グラ修道院（1382年）

同――「黒いマリア」像（1384－寄進）

仕業だともいう。その後、早速、当時の国王ウワディス二世によって手厚く修復され、ロシア・イコンに倣う今日の晴れ姿となる。なお、この聖母像は、一六二一年の「クラクフ司教会議」で公の認証をえている。

それ以来、このヤスナ・グラの聖母像は、大量に複製化されてポーランド全土に普及し、いまなお「黒いマリア」（マドンナ）の愛称で親しまれている。今日、ポーランドには、ヨーロッパでも著名なグニエズノやクラクフをはじめ、あるいは近年脚光を浴びるリヘン等もふくめて、多数のマリア信仰の聖地がある。とくにクラクフは、名高い教皇として親しまれるヨハネ・パウロ二世が過ごした「記念すべき都市」でもある。その中でも、チェンストホヴァのヤスナ・グラ修道院は、名だたる国民的巡礼地として不動の位置をしめる。当然ながら、ポーランドにおける「マリア巡礼」の一大拠点でもある。ちなみに、ワルシャワからチェンストホヴァに向かった「最初の巡礼」の公式記録は、一七一一年であった。

なお、一見異様な「黒い聖母像」をめぐっては、これまでも多様な探索がある。おもな論点は、その形態、色彩および起源等である。とくに、「黒」という事物の色彩表現は、古代オリエント世界を巻きこむ広大な視座が必要であろう。一瞥すれば、古代オリエント世界にみる「黒」は、大地の豊穣な生命力を司る「大地母神」（マグナ・マーテル）の色である。いわば、万物を生みだす「根源的な色彩」でもある。その代表的な事例として、古代フリギア（小アジア中西部）の「キュベレ女神」、古代エジプトの「イシス女神」および古代ギリシアの「アルテミス女神」等をあげることができよう。いずれも、古代東方の「黒い霊石」信仰を擬人化したもので、原初の万物を生みだす大地母神である。今日、「サンティアゴ巡礼」の路上に出会う「黒い聖母」像は、その拡大と変容の所産であるともいえよう。

これまで、その「黒い聖母」の謎をめぐって、私自身もいくどともなくヨーロッパ・地中海世界からオリエントさらに新大陸世界への旅路についたことがある。その一環として、ポーランドの守護聖人・聖スタニスワフを祀るクラクフから、異色の「チェンストヴァ巡礼」に出向いたのは二〇〇四年のことであった。その道行きは、同時に人間の極限的な罪業を象徴する「アウシュヴィツ」（現・オシフィエンチム）への贖罪の旅でもあった。

四　ドイツ巡礼運動とバロック美術

――「フィアツェーンハイリゲン聖堂」（ドイツ）

ヨーロッパの中央部にあるドイツは、これまで激しい歴史変動の舞台ともなった。ちなみに、太古の旧石器時代には、いち早く「最古のヨーロッパ人」とされるハイデルベルク人が居住し、続くネアンデルタール人も新たな境地を拓いている。そのドイツの地勢は、一言でいえば「北低南高」の形をとる。いわゆる、北部の北海やバルト海に面する海域から、南部のアルプス山麓へと徐々に高度と起伏をましている。そのアルプスに発する大河川の一つが「父なるライン」であり、他の一つが「母なるドナウ」である。多面、このような地理的要因が、ドイツの歴史に複雑な影を落としているともいえよう。

もとより、ドイツ人の多くはゲルマン系種族からなっている。しかも、歴史的には、フランスやイギリスと異なり「ローマ文明の圏外」にあった。それだけに、ゲルマン的な伝統を色濃くのこし、その民族的な誇りも高い。とはいえ、かつてのドイツ西南の一部は、ローマ帝国の支配下にあり、その文化接触は多神教を奉じるゲルマン

人がキリスト教に改宗する転機ともなった。また、非ゲルマン人であるローマ人やケルト人との混血も否定できない。

とくに中世期には、いち早くオットー一世（大帝）が考案し、その後ドイツ封建諸侯によって推進された「東方植民」政策（一二―一四世紀）がある。いわゆる、「エルベ川以東」のスラブ人地域を脅かす大規模な進出である。その帰趨として、現地スラブ人との混血や同化も深まり、のちにドイツ帝国の中心となる「プロイセン王国」（一七〇一―一九一八年）の下地ともなった。いわば、「ドイツ国家」の重心は、本来ゲルマン人の本拠地である西のライン川流域から、スラブの血が沸く東のエルベ川以東へと移動する。

ところで、ナチス・ドイツの統帥ヒトラーは、自らそのスラブの血に染まりながら「ゲルマン純血主義」を説いたことになる。いまあらためて、ナチス・ドイツの犯した「負の遺産」（ホロコースト）を自省し、人間の心に深くひそむ「民族神話」の妄想を解くべきであろう。申すまでもなく、A・トインビーが生涯に身を賭した知的遺産は、いまなお「生身の神」として蔓延するナショナリズムの超克にあった。

他方、ドイツ宗教美術の誕生は、新たな美術原理を打ち出した「オットー朝美術」（一〇―一一世紀）に認められよう。いわゆる、前代の「カロリング朝ルネサンス」（八―九世紀）にみる復古的精神を継承し、さらに対抗するビザンティン美術も加味した独自の造型意欲と表現形式を生んでいる。たとえば、その建築プランとして、聖堂の西正面には双塔が整備され、また東西の両端にはアプシス（後陣―祭室）が配置される。一代表事例として、ヒルデスハイムのザンクト・ミヒャエル修道院聖堂がある。その由来について、一説では、北アフリカの初期キリスト教聖堂や古代東方起源説も説かれている。いずれにせよ、次代の延引された「ロマネスク建築」の基盤を

フィアツェーンハイリゲン聖堂（1743－72年）

同 ── 身廊部のストゥッコ装飾

築いたといえよう。

ここで、ドイツを中心舞台とする特有の宗教事情も見逃せない。すなわち、一六世紀の「宗教改革」以降は、北のプロテスタント美術圏と南のカトリック美術圏に分断される。その後、宗教戦争の暗雲を刻む「三〇年戦争」（一六一八―四八年）の終結は、新たに平和への祈りをこめた教会建築への機運を高めた。とくに、北のプロテスタント圏では簡素なゴシック式建築が、また南のカトリック圏では壮麗なバロック式建築が建立された。

後者の代表例の一つが、南ドイツのバンツ近郊にある「フィアツェーンハイリゲン聖堂」（一七四三―七二年）である。この聖堂は、かつて羊飼いの少年に高徳な「十四救護聖人」が現れたという、いわば奇跡の「聖所」に建てられた。とくに、南ドイツでは民衆の大きな崇敬をあつめ、その後全ドイツに広まる巡礼運動の一拠点ともなった。建築設計は、ドイツ・バロックの巨匠ノイマンが担当し、また室内装飾はストゥッコ彫刻の名工フォイヒトマイヤーの手になる。とりわけ、聖堂内の流麗な円と楕円が織りなす広やかな空間構成と、金色に縁どりされた優美なストゥッコ装飾が偉観をそえる。まさに、天上の音楽が奏でる「美の舞踏」である。

他面、美術史上に「ゆがんだ美術」とも揶揄されるバロック芸術の蘇りであり、また「最後の爛熟」でもある。この、荘重にして典雅なドイツ宗教芸術の精華「フィアツェーンハイリゲン聖堂」を訪れたのは、春の清らかな陽光が射し込む一九九二年のことであった。

五　エルサレム巡礼とアトス山巡礼の間

――「リラの修道院・聖母聖堂」（ブルガリア）

ヨーロッパ東南部の三方を海に囲まれたバルカン半島は、古来「北方・東方諸人種のるつぼ」とも称された。最古の先住民族として、トラキア人やダキア人等が住み込み、いち早く金銀の採掘や交易活動を行っている。かつて、エーゲ海は「トラキア海」と呼ばれたこともある。その地に、まずギリシア人が植民し、後にローマ帝国の属州となる。他方、東方古代ペルシアの侵略もうける。その後、バルカンの基幹民族となるスラブ人が南下して「ビザンティン帝国」、次いで「オスマン帝国」の統治下にもおかれた。いわば、このバルカン半島は、東西文明の利権が渦巻く「民族錯綜の地」でもあった。今日、その歴史的な「特殊性」が醸す否定的なイメージは消しがたい。

とくに、第一次世界大戦前のバルカン諸国は、久しくオスマン帝国の主権下にあり、スラブ系諸民族の激しい民族運動が展開される。その間隙を突くかのように、ヨーロッパ列強による支配権争奪の渦中にも投じられた。さらに、バルカン諸民族の激しい解放闘争の舞台ともなる。いわゆる、一連の国際紛争に進展する「バルカン戦争」（一九一二―一三）への道程である。ヨーロッパ諸国は、そのバルカン地域を名ざして「ヨーロッパの火薬庫」と喧伝し、第一次世界大戦の導火線ともなった。かつては、美しい「西洋のオリエント」とも謳われた「サラエヴォ」の悲劇（一九一四、六・二八日）は、その深層に民族神話の禍根となる「汎ゲルマン主義」と「汎ス

リラ修道院・聖母聖堂（14世紀）

同――イコノスタシス（イコンで飾られた内陣障壁）

ラブ主義」の軋轢を宿している、ともいえよう。

つぎに、美術史上の論点として、バルカン半島の栄華を誇る「ブルガリアの美術」に注目したい。その源泉は、最古の住民である「トラキア人の美術」にあろう。今日、有名な「バラの谷」に隣接する「カザンラク古墳」（装飾壁画、紀元前三〇〇年）は、その典雅な葬送儀礼を秘めた代表作である。また中世期には、ビザンティン美術の影響下におかれる。しかし、「フレスコ画」等の分野では、その伝統的な画法と異なる人間感情の劇的な表現が顕著となる。そこに、首都のビザンティン美術から離れた「バルカン美術」の独創性を見ることもできよう。さらに一九世紀後半には、「オスマン帝国」の衰運に呼応して、新たに「ブルガリア・ルネサンス」ともいうべき文化的な復興運動が開花した。いわゆる、ビザンティン絵画の規範から自立し、またトルコの桎梏からも脱した「ブルガリア芸術」の誕生である。

とくに「リラの修道院」は、ブルガリア正教を代表する最大の修道院である。その起源は、一〇世紀にリラ山中の奥深い洞窟で、いとも清貧な隠修生活に徹したイヴァン・リルスキーに遡る。今日でも、ブルガリア民族の「偉大な聖地」として名高い。一三世紀の初頭には、かのエルサレム巡礼とアトス山巡礼が交差する重要な拠点ともなった。さらに、折にふれブルガリア民族再興の精神的なシンボルともなる。その絶大な権威と隆盛は、たとえ時の支配者が変わっても揺らぐことはなかった。多面、幾たびかの大地震や大火に見舞われながらも、再建への槌音が絶えることはなかった。

中でも、最大の僧房群に囲まれた「聖母聖堂」は、白と黒の横縞文様アーチを基底とし、ギリシア十字形プランに多くのドーム（円蓋）を架している。突如として、人里離れた渓谷に浮上する大僧院は、ひそかに「ヨーロ

ッパとアジア」を結ぶ桃源郷かのようである。他方、聖堂内部の「イコノスタシス」（内陣障壁）には、金箔を施した華麗なイコン群が連なり、また屋外回廊の天井や壁面には、色彩豊かな「フレスコ面」が所狭しと描かれている。まさに、「ブルガリア宗教芸術」の至宝として、独自の旋律を奏でる世界遺産である。

今日、新たな「バルカン学」の課題は、自ら地域名を「南東欧」と改めながら、長年の憎悪と猜疑心に染む「民族主義」をいかに脱却するかにある。このほど、その歴史的な和解を期した「共同歴史プロジェクト」の成果として、南東欧（一一カ国）の歴史家たちが集う『バルカンの歴史―バルカン近現代史の共通教材』（G・クルリ総編集責任、柴宜弘監訳、二〇一三、明石書店）が出版された。一連の凄惨な「ユーゴスラヴィア紛争」（一九九一―九五年）の教訓から、まずは自民族中心の歴史教育を相対化し、何よりも他者への理解と共同の未来を託した「画期的な仕事」である。現今の、アジアにおける「日本問題」としても学ぶ点は多い。

かつて、スラブ、バルカン研究の先駆者である森安達也氏や柴宜弘氏等と組んだ「共同研究」（「東欧・ロシア文明論」）がある。その報告書『東欧・ロシア―文明の回廊』（聖心女子大学キリスト教文化研究所編、春秋社刊、一九九四年）を心の糧とし、他面A・トインビーも「特別の関心」を寄せたバルカン半島を巡歴したのは、折しも「第一次世界大戦一〇〇周年」を迎える二〇一二年から一三年のことであった。

[付]『巡礼文明論』の手帖」（記録・一―五号）

一　「聖なるもの」の普遍性（二〇一〇・三）

1　スペイン・サンティアゴ巡礼の景観（グレゴリオ聖歌と声明）

2　「二一世紀の黙示録」と共生の風景（「文明間対話」へのメッセージ）

3　「巡礼の道」と文明の回廊（「人類と母なる大地」のゆくえ）

二　「聖なる美」の根源性（二〇一一・三）

1　「モザイク芸術」と色彩のシンフォニー（サン・ヴィターレ聖堂―イタリア）

2　「アラブ・ノルマン様式」と美の旋律（モンレアーレ大聖堂―シチリア）

3　「天地創造図」のタピスリーと曼荼羅（ヘローナ大聖堂―スペイン）

4　『ベアトゥス写本』と東方の遺産（エル・エスコリアール修道院―スペイン）

5　『ダロウの書』と渦巻文様（ダブリン大学トリニティ・カレッジ図書館―アイルランド）

6　「ビザンティン美術」と存在の神秘（オシオス・ルーカス修道院―ギリシア）

7　「アルメニア聖堂」と円蓋への愛（エチミアジン大聖堂―アルメニア）

8　「ヨーロッパの略奪」と没落（ベイルート国立博物館―レバノン）

9　「コプト美術」の沈黙と霊性（コプト美術館―エジプト）

10　「ティムール朝美術」の開花と栄華（グール・エミール廟―ウズベキスタン）

11　「太陽の石」とアステカの宇宙観（メキシコ国立博物館―メキシコ）

三　「聖なる旅」の比較文明学（二〇一二・三）

1　「聖なるもの」の刻印（「文明と聖なるもの」―隠された記号の開示）

2　「逆光の巡礼論」を読む（「文明交流圏」の舞台―イスラーム・ルートとシャルトル大聖堂）

3　『巡礼文明論』の手帖」と旅の思想（トインビーとエリアーデの彼方に）

四　旅人・木間瀬精三先生の肖像（二〇一四・三）

1　「木間瀬ノート」の調べ（広大な「世界史」への道）

2　木間瀬作品の余光（『死の舞踏』と『幻想の天国』）

3　木間瀬史学の挑戦（ヨーロッパの「誕生問題」）

4　木間瀬紀行の遍歴（「地中海巡礼」の風光）

五　「黙示録」の旅路と印象（二〇一七・三）

1　「黙示録」の謎と希望のメッセージ（オリエントのキリスト教）

2　「黙示録美術」の誕生と変容（「サンティアゴ巡礼」とロマネスク美術）

3　「黙示録」の幻想と霊感（モアサックのサン・ピエール聖堂―フランス）

4　「ベアトゥス写本」と終末のビジョン（エル・エスコリアール修道院―スペイン）

5　「天地創造図」と宇宙観（ヘローナ大聖堂―スペイン）

6　イスラーム世界のキリスト教会堂（ダマスカスのウマイヤ・モスクーシリア）